

題目

「自己志向・他者志向エゴグラム MIE（新称 IUE）と症状類型の関連」

著者

西川和夫* *三重大学

掲載誌

交流分析研究（日本交流分析学会） 1997年、第22巻、第2号、pp.149~158

分類

臨床的応用研究

問題および目的

質問紙エゴグラムで測定された自我状態の機能が、心身症の臨床的症状に対応して、健常群とは異なる特徴を示すことが報告されている。症状類型により異なるが、共通する特徴として、自我抑制的な AC の亢進と開放的な FC の低下が指摘されている。これらは、自己志向自我機能と他者志向自我機能を仮定する MIE（新称 IUE）の、IAC（自己志向 AC）と UFC（他者志向 FC）に対応することが確かめられている。複数の心理尺度との相関分析に基づき、MIE の下位尺度 ICP（自己志向 CP）、INP（自己志向 NP）、UNP（他者志向 NP）、UA（他者志向 A）、UFC は自他に肯定的関係を形成する適応的自我状態の機能となりやすく、IAC、UCP（他者志向 CP）、UAC（他者志向 AC）は抑圧・攻撃的な傾向や否定的構えを内在させ、不適応的に機能しやすいことが示されている。本研究は、これらの適応機能的自我状態尺度と不適応機能的自我状態尺度における、心理症状群の特徴を明らかにしようとする。

方法

症状群：カウンセリングに来談したクライアント 89 名（男 61 名、女 28 名、平均年齢 31 歳）。初回面接時にエゴグラム MIE を実施した。

健常群：統制群として MIE を実施した 784 名（男 382 名、女 402 名、平均年齢 22 歳）。

症状群の分類法：初回面接時に訴えられた症状や心理的苦痛の具体的報告出現率に基づいて、できるだけ重複を避けた差異の明確な下位群に分類した。

症状群の類型：1）対人緊張群（N=34）；他人からの否定的評価をおそれて、失敗回避的に緊張する症状群である。2）対人不満群（N=17）；他者支配的欲求が強いものの、他者を自分が望むように操作することが困難で、他者不満・不信、無力感・被害感を持ちやすい特徴を示す。3）不安抑うつ群（N=23）；無力感や不安感が強く、混乱した自己否定的な感情に支配されて、自律神経失調や自閉的になる症状が特徴である。4）パニック・混乱群（N=15）；日常的な意味のいわゆるパニックを表す。緊張場面で恐慌・狼狽状態になり、混乱、不安、絶望に陥りやすい傾向を特徴とする。

結果および考察

症状群全体の自我状態機能：症状群全体の下位尺度値は、IA（自己志向 A）を除きすべて健常群と有意な差を示した。不適応的な機能を反映する IAC、UCP。UAC は健常群よ

り高い値を示しているが、適応的な機能を表す他の下位尺度値は健常群より低い。症状類型間の自己志向下位尺度比較：各類型に属する標本数が小さいが、下位尺度ごとにいくつか有意な差異が確認された。1) ICPについては「対人緊張群」(M=8.64)が「不安抑うつ群」(M=6.69)より高い値を示した($p < .05$)。2) INPでは平均値の高い順に「対人緊張群」(M=7.73)、「対人不満群」(M=7.70)、「パニック・混乱群」(M=5.53)、「不安抑うつ群」(M=4.95)となっている。「対人緊張群」と「パニック・混乱群」の間($p < .05$)、「不安抑うつ群」の間($p < .001$)、および「対人不満群」と「不安抑うつ群」の間($p < .05$)に有意な差が見られる。3) IACに関しては、「不安抑うつ群」(M=13.65)の得点が「対人緊張群」(M=11.02)より有意に高い($p < .01$)。IA(自己志向A)とIFC(自己志向FC)については症状群間に有意な差が認められなかった。

症状類型間の他者志向下位尺度比較：UCPとUACについてのみ症状群間に有意な差が見られた。1) UCPは「対人不満群」(M=9.41)が最も高く。次いで「不安抑うつ群」(7.26)、「パニック・混乱群」(M=6.93)、「対人緊張群」(M=6.85)の順である。「対人不満群」と「不安抑うつ群」の間($p < .05$)、「パニック・混乱群」との間($p < .05$)および「対人緊張群」との間($p < .01$)は有意であるが、残りの群間には有意な差が認められなかった。2) UACでは「対人緊張群」(M=11.70)が「対人不満群」(M=9.35)より有意に高い($p < .01$)。

基本的構えの症状群間比較：INP、IAC、UNP、UCPの組み合わせに基づいて推定された自他に対する構えは、肯定的構えはすべて健常群が高く否定的構えはすべて症状群が高い値を示した。自他肯定の構えでは症状群の中で「対人緊張群」(M=31.7)が最も高く、自他否定的構えでは「不安抑うつ群」(M=39.4)が最も高い。特に自己否定的傾向が強い(M=41.9)ことが確かめられた。他者否定の構えは「対人不満群」が最も高かった(M=28.8)。

考察：下位尺度値の群間比較パターンから明らかになった、症状類型の自我状態機能の特徴は以下の如くである。1) 「対人緊張群」は、症状群の中では相対的に適応的な機能性が認められる。他者からよい評価を得られる望ましい自分になるために、過剰な順応努力を払うことに心理エネルギーが供給される。2) 「対人不満群」は、相手に対して一方的で独善的に関わり、人間関係に不調を来しやすい傾向を示す。他の症状群に比較して、他者否定的構えが強いことが分かる。3) 「不安抑うつ群」は、無力で傷つきやすい「子ども」(IAC)の状態に止まり、自己を守る保護的養育的「親」(INP)が機能不全に陥っていることを示している。4) 「パニック・混乱群」は、混在した自我機能を示すが、「不安抑うつ群」よりはいくぶん自己否定的な傷つきやすさが少なく、やや現実適応的傾向がうかがえる。5) 以上の結果から、自己志向他者志向エゴグラムMIE(新称IUE)の下位尺度は、微妙な心理症状に対して識別性の高い測度となることが確かめられた。

(要約者：西川和夫)